国語教科書と日本語教科書の比較：ジェンダーの視点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍵主, 智美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17089

国語教科書と日本語教科書の比較

―ジェンダーの視点から―

経済学部　経済学科４年　鍵主 智美*

＜概 要＞

教科書は教育課程においてそのよりどころとして繰り返し使用されるため、学習者が教科書から受ける影響はかなり大きいと考えられる。かつては、男女差別的とみなされるような表現が使われた教科書もあった。また、最近の教科書の中にもまだ男女差別的だとみなしうる表現が使われているものもある。

本稿では、中学校の国語教科書を対象に、ジェンダーという視点から男女がどのように表現されているのかについてその歴史的な推移を調査した。また、同様の視点から中学校の国語教科書と日本語の教科書の男女の表現にどのような違いがあるのかについても調査した。その結果、教科書内の男女にかかわる表現は、①必ずしも平等とは言えないこと、②その不平等は一部では、年代を経るにしたがって改善されていること、そして、③国語教科書と日本語教科書には男女の表現について違いが認められることが明らかになった。

＜キーワード＞

国語教科書、日本語教科書、比較、ジェンダー、差別

* E-mail: kirarara---7starsrealgoldlala@vodafone.ne.jp

目　次

1. 序論
1.1. 研究の目的
1.2. ジェンダーの視点から教科書を分析した先行研究
1.3. 調査対象とする国語教科書
1.4. 仮説
1.5. 教科書の分析の視点

2. 結果と考察
2.1. 登場の頻度
2.1.1. 作者の性別
2.1.2. 作品中の登場人物(言及される人物)の性別
2.1.3. 作品中の主人公の性別
2.2. 言及される際の呼称
2.2.1. 固有名詞
2.2.2. 親族名称
2.3. 登場人物の描かれ方
2.3.1. 1966 年の教科書
2.3.2. 1978 年の教科書
2.3.3. 1989 年の教科書
2.3.4. 1997 年の教科書
2.3.5. 2006 年の教科書

3. 結論

文献

1. 序論

1.1. 研究の目的

社会の中での男女平等は達成されるべき重要な目的の 1 つである。言語のレベルでもその達成のための取り組みが行われている。「看護婦」や「保母」といった男女を限定するような職業名が「看護師」や「保育士」などのように性を特定しない名称に改められたことはその一例である。しかし、そのような動きの中にあっても、例えば「女子アナ」のように、未だに男女差別と認識されるような言語表現が使用されることもある。

では、教育の場においては男女平等を実現するためにどのような取り組みが行われているだろうか。例えば、教科書の中での男女の記述はどのようになっているだろうか。ここでいう教科書というのは一般に義務教育で使用されている教材のことである。教科書は当該分野の標準的な基礎知識を提供するために作られるものであり、一種の規範ともいえるものである。そうであるならば、教科書の中にはその社会で多くの人が正しい、あるいはこうあるべきだと考える社会像が反映されているはずである。教科書の内容は授業で繰り返し教えられる。そしてテストによってさらに内容の理解と定着の確認が行われる。そのような過程を経ることによって教科書の記述が教科書使用者の価値観に影響を与えることも少なからずあるだろう。すなわち、教科書を通してその使用者が社会によって求められる特定の男女それぞれの像を思い描いてしまうこともあるかもしれない。ところで、すでにふれたように、現代では、男女は平等に扱われるべきであるという価値観が人々の間に浸透しつつあり、男女平等を実現しようという取り組みも活発に行われている。このような人々の意識の変化は教科書にどのように反映されているのだろうか、あるいはされていないのだろうか。もしされているならどのような形でどの程度反映されているのだろうか。

本稿の目的は教科書における男女の表現のされ方を歴史的に調査し、その推移を明らかにすることにある。そしてそれによって明らかとなった表現が男女平等なものでなければ、その表現のどこが問題なのか、どうすれば平等なものとなるのかについて検討する。

1.2. ジェンダーの視点から教科書を分析した先行研究

教科書の中の男女差別について扱った先行研究には、たとえば伊藤ほか(1991)、かながわ女性会議・教育部会(1992)、21 世紀教育問題研究会(1994)、鍵主(2008)がある。

伊藤ほか(1991)は、小学校および中学校の国語・社会・家庭・道徳という 4

教科の教科書の中での男女差別について検討している。彼らはこれらの教科書の中で女性の登場回数が男性に比べて少ないこと、性的役割分業のステレオタイプと密接に結びついた表現が使われていることなどを指摘し、教科書の中で男女差別があることを明らかにした。そして、表現の改善方法にも言及している。

かながわ女性会議・教育部会(1992)では、1992 年度版小学校教科書の国語・生活・社会・家庭・保健の 5 教科の教科書を対象とし、次の 4 つの視点を中心に分析が行われている。1 つ目は男女の差別の指摘と是正が、どのようにとりあげられているか、2 つ目に性別役割分業について、記述やさし絵、写真の中では、どのように扱われているか、3 つ目に男女を問わずそれぞれが主体となり、一つの人格を持つ存在として扱われているか、そして最後に男性と女性が主従や優劣の関係ではなく、共に生きるという視点からとらえられているか、の 4 点である。この研究においても、女性の登場回数が男性に比べて圧倒的に少ないこと、ある特定の職業と性別を結びつけた性的役割分業の表現が使われていること、男性は積極的に、女性は受動的に描かれていることなどが指摘されている。

21 世紀教育問題研究会(1994)では、1992 年度用のすべての小学校教科書(国語・社会・算数・理科・生活・音楽・図画工作・家庭・保健の 9 教科)を対象とし、性差別・性的役割分業の撤廃をめざすこと、男女それぞれが自立した主体となること、男女が共に生きかつ対等な関係をつくりだすこと、の 3 つの視点を設定し分析を行っている。その結果、対象とした教科書では、男女の扱われ方に違いがみられることが明らかにされている。具体的には、物語の中心人物や歴史でとりあげられる主要人物に男性が多いこと、遊びの内容や服装の色などで男女を区別した表現が多いことなどで、性差別と性別役割分業意識が見られると指摘している。また、女性はやさしく、男性に従い、男性は経済的に家族を支え、家族の生活の決定権を持つように描かれるなど、伝統的な「男らしさ」、「女らしさ」を強調する描写があることも指摘している。

鍵主(2008)では、1960 年代から 90 年代に発行された日本語学習者用の日本語教科書の中の例文を対象として、登場の頻度、言及される際の呼称、形容のされ方に男女でどのような差があるのかという視点から、時代の変化による表現の移り変わりについて分析している。その結果、登場頻度は男性が女性よりも多いこと、男性は名前などの固有名詞で、女性は「お母さん」などの親族名称で言及されることが多いこと、女性は男性と比べて容姿などの外見を表現するものと結び付けられやすい傾向があることが明らかにされた。また、登場の頻度を除いては、男女の表現の差は年代を経るにつれて小さくなっていることも示された。

また、先行研究においては新聞や辞書の中の男女差別を研究するものも多くみられる。例えば、新聞に関する研究では田中・諸橋(1996)が、辞書に関する研究ではことばと女を考える会(1985)が挙げられる。しかし教科書の中の言語表現について、言語学の視点から男女差別をテーマにしたものはほとんどみられなかった。また、伊藤ほか(1991)のように教科書の中の男女差別を検討している先行研究においても、日本語学習者が使用する日本語教科書内での男女の表現に関する調査との比較はみられなかった。日本語を外国語として学習する人向けの日本語教科書では、対象読者がさまざまな国の人であることから、対象を主に日本語母語話者に限定している小中高で使われる国語や社会などの一般教科の教科書とは、男女の表現の点で異なる傾向が現れる可能性がある。また、以下に述べるように中学校の教科書を分析対象としている調査も少ない。そこで本稿では、これまで扱われてこなかった日本語学習者対象の日本語教科書と日本の中学校国語教科書との比較を試みる。

これらをジェンダーの視点から分析することによって、日本語教科書内および国語教科書内での男女の表現についての問題点や優れている点を明らかにする。なお、本稿ではジェンダーを「社会的、文化的に作られる男女の差異」という意味で使用している。この研究は男女の表現という点において日本語教科書と日本の国語教科書それぞれの長所と短所が明らかになるため、双方の改善に貢献しうるはずである。

1.3. 調査対象とする国語教科書

本稿で分析対象とする国語教科書は、光村図書が発行している国語教科書の中から次の5冊である。

『中等新国語　三』(1966)
『中等新国語　三』(1978)
『国語3』(1989)
『国語3』(1997)
『国語3』(2006)

これらの教科書を選定した理由について以下に述べる。

まず、光村図書の国語教科書を対象にしたのは、市場占有率が最も高いからである。教科書の市場占有率については、少し古いが教科書の市場占有率を歴史的にまとめてある『教科書レポート'97』の68ページの表を参考にした。それによると、1966～97年度の国語教科書の占有率は光村図書が連続して1位であ

る。市場占有率が高いということは、使用者数も多いということである。それだけ人々の目に触れる機会も多く、学習者に影響を与える可能性が高いと考えられるからである。

また、さまざまな教科の学校教科書の中でも、とくに国語教科書を選定したのは、日本語教科書との比較をするためである。さらに、日本語の教科書を分析した鍵主(2008)との比較が可能なようにそれと対応した年代の教科書を選んだ。本稿で取り上げる 1966 年、1978 年、1989 年、1997 年の国語教科書は、それぞれ、鍵主(2008)の 1967 年、1974－1981 年、1990－1993 年、1998 年に対応している。なお、本稿の 2006 年に対応する日本語教科書は調査されていないが、本稿ではできるだけ新しい教科書の男女の表現も調査したいので、2006 年発行の国語教科書も分析対象に含めることにした。

国語教科書の中でもとくに中学校の国語教科書を対象としたのは、これまでの先行研究において、小学校の教科書を研究したものは多くみられたが、中学校の教科書を対象としたものはほとんどなかったからである。もし小学校の教科書でせっかく男女の差別のないような表現をするよう配慮しても、中学校でその配慮がなくなってしまっては、意味がないだろう。このような調査によって、中学校の教科書の実態も明らかにし、改善するための手がかりをさぐることは重要なことであると考えられる。

1.4. 仮説

本稿では 2 つの仮説を立てる。

まず、1 つ目は、中学校の国語教科書における男女の表現は教科書の出版年が後になるにつれ、男女差別的な表現が減少し、男女が平等に扱われるような表現に改善されていくということである。鍵主(2008)では、日本語の教科書の中での男女の表現は、時代を経るにつれて、言語学分野におけるジェンダーに関する研究などの影響をうけ、男女差別ととられるような表現が少なくなっているという仮説を提示した。その調査の結果、登場頻度の一部では必ずしも男女の差が改善されていない部分もみられたが、ある程度は男女差別的な表現が時代を経るにしたがって改善されつつあるということが明らかになった。本研究が分析対象とする日本の国語教科書においても同じような傾向がみられると考えられる。すなわち、言語学分野でジェンダーの研究が取り入れられ始めた 1970 年代、ジェンダー研究が活発になり始めた 1980 年代、一般の人々にジェンダー意識が浸透し始めた 1990 年代以降、と年代経るにつれてジェンダーに関する意識が高まり、それが国語の教科書における男女の表現にも影響して、男女差別的な表現の改善につながっているだろうということである。

2つ目の仮説は、外国人向けの日本語の教科書と日本の国語教科書とを比較した場合、国語教科書に比べ、日本語の教科書は男女差別的な表現が少ないということである。そのように考えるのは、日本語の教科書を使って学ぶ学習者は、日本以外のさまざまな国々出身の多様な文化的背景をもつ人々であるので、教科書中の男女の表現に対しても注意深く配慮してある可能性があるからである。

1.5. 教科書の分析の視点

本稿では、先に述べた仮説を検証するために、中学校国語教科書における男女差別を調査するに際して、次の3つの視点を設定する：

(1) 登場の頻度
(2) 言及される際の呼称
(3) 登場人物の描かれ方(形容のされかたも含む)

(1)の登場の頻度については、とくに次の3つの視点から調査する：

(1－1) 作者の性別
(1－2) 作品中の登場人物(言及される人物)の性別
(1－3) 作品中の主人公の性別

このように登場の頻度をさらに3つの視点に分けて調査を行うのは、登場頻度の中でも作者や登場人物のうちでもとくに主人公になっている人物などは、主体性が高く、男性がそのような人物として多く登場しているという、男女差別的な現象が起こっている可能性があると考えたからである。

上記の3つの視点についてもう少し詳しく説明しよう。

(1－1) の作者の性別でいう「作者」というのは、国語教科書の中に収録されている物語や説明文などの著者のことである(教科書の編集者や監修者のことではない)。

(1－2) の作品中の登場人物というのは、国語教科書の中に収録されている、物語の中であれば登場人物のこと、説明文やその他の収録物であれば、登場人物という表現は適当でないかもしれないので、その場合はその中で言及されている人物のことをさす。

(1－3) 作品中の主人公の性別、というのは物語であれば、主人公、説明文やその他の収録物であれば、そのなかで頻繁に言及されている人物のことである。

また、(2)の言及される際の呼称はとくに次の2点に分けて分析する：

(2－1) 固有名詞で呼ばれる場合
(2－2) 親族名称で呼ばれる場合

固有名称で呼ばれるのは個人として見られているという性質が、他方、親族名称で呼ばれるのは個人よりも家族の中での何らかの役割をもった人物としての性質が、それぞれ重要視されているということが言えるからである。

(3)の登場人物の描かれ方、について調査するのは、具体的に調査対象となっている教科書の中で、男女がどのように捉えられているのかを明らかにするためである。物語の中ではキャラクターがどのように描かれているのかを詳しくみることができる。

また、本稿は鍵主(2008)の調査結果との比較を試みるため、(1) 登場の頻度、(2) 言及される際の呼称、(3) 登場人物がどのような人物として描かれているか(形容のされかたも含む)の 3 点は鍵主(2008)の分析視点と対応している。また、本稿の(1)登場の頻度の中の、(1－1) 作者の性別、(1－2) 作品中の登場人物(言及されている人物)の性別、(1－3) 作品中の主人公の性別については、鍵主(2008)の(1) 登場の頻度の(1－1) 文の話者として、(1－2) 文中で言及される人物として、(1－3) 文中で言及される人物の中でとくに文の主語となっている人物として、とそれぞれ対応するように設定した(**表 1**)。以下では、文の話者と作者を合わせて「語り手」、文中で言及される人物と作品中の登場人物(言及されている人物) を合わせて、「語り手によって言及される人物」、文中で言及される人物の中でとくに文の主語となっている人物と作品中の主人公を合わせて、「語り手に言及される人物の中でもとくに主体的な位置にいる人物」と呼ぶ。

表 1：分析の視点の対応について

役割の共通点	語り手である点	語り手に言及される人物である点	語り手に言及される人物の中でもとくに主体的な位置にいる点
鍵主(2008)	文の話者	文中で言及される人物	文中で言及される人物の中でとくに文の主語となっている人物
本研究	作者	作品中の登場人物(言及されている人物)	作品中の主人公

2. 結果と考察

2.1. 登場の頻度

登場の頻度については、すでに述べたように、(1－1) 作者の性別、(1－2) 作品中の登場人物(言及されている人物)の性別、(1－3) 作品中の主人公の性別の 3 つの観点から調査した。以下では、それぞれの結果について報告する。

2.1.1. 作者の性別

上記「分析の視点」でも述べたように、ここでいう作者というのは、対象教科書に収録されているそれぞれの作品の作者のことである。

グラフ 1 は、国語教科書中の作品の作者についてその性別を年代ごとに調べた結果をまとめたものである。このグラフから、作者はどの年代においても女性より男性の方が多いことがわかる。時代を経るにつれて、男性は減少傾向に、女性は増加傾向にあり、男女の差が小さくなってきている。それぞれの年代において男女の差が何ポイントあるかを鍵主(2008)の結果とともに表にした(**表 2**)。**表 2** の日本語の教科書の 1990－1993 年のものは国語教科書の 1989 年のものと対応させている。この表では国語教科書の年代に合わせて 80 年代と表示する(以下同様)。表 2 からどの年代においても、日本語教科書より国語教科書の方が男女の差が大きいことが分かる。

グラフ 1：男女別の登場頻度 (1－1) 作者の性別 (単位は%)

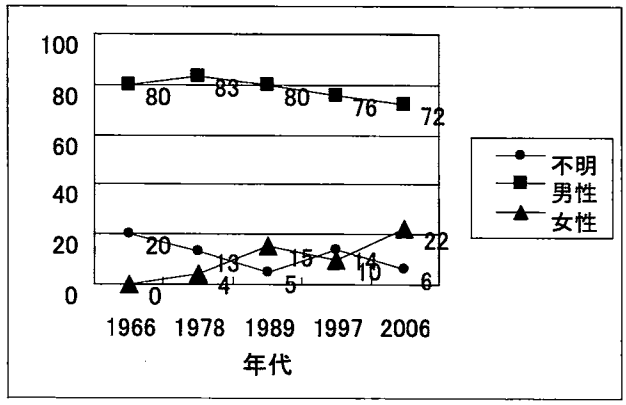

表 2：語り手の男女の差　(単位はポイント)

	60 年代	70 年代	80 年代	90 年代
国語教科書	80	79	65	66
日本語教科書	4	4	21	4

2.1.2. 作品中の登場人物(言及される人物)の性別

次に、教科書中に収録されている作品の登場人物(動物も含む)の性別を調べた結果を述べる。**グラフ 2** はそれをまとめたものである。どの年代においても男性の方が女性よりも多いことが分かる。男女の差は 1966 年が最大で 40 ポイントあったが、1978 年には 29 ポイント、1989 年には 22 ポイントと減少している。しかし、1997 年には 37 ポイント、2006 年には 36 ポイントと男女の差は再び大きくなり、その差は 1966 年時よりやや小さいがほぼ同じである。**表 3** は、男女の差を鍵主(2008)の日本語教科書の分析結果とともに、年代ごとにまとめたものである。どの年代においても男女の差は、日本語教科書よりも国語教科書の方が大きいことが分かる。

グラフ 2：男女別の登場頻度 (1－2)作品中の登場人物の性別　(単位は%)

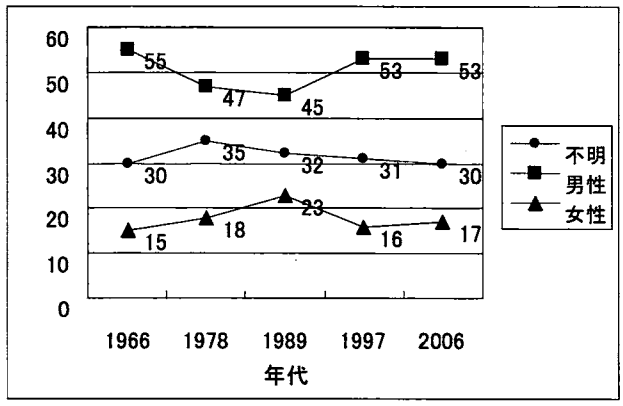

表 3：語り手に言及される人物の男女の差　(単位はポイント)

	60 年代	70 年代	80 年代	90 年代
国語教科書	40	29	22	37
日本語教科書	6	16	18	11

2.1.3. 作品中の主人公の性別

次に、国語教科書の作品中の登場人物(言及されている人物)の中でも、主人公となっている人物(主に言及されている人物)の性別について述べる(**グラフ 3** 参照)。どの年代の教科書においても、男性の方が女性よりも多い。男性の方は 1989 年を除くと、ほぼ同じ割合である。女性の方は、年代を経るにつれて、増加傾向にある。男女の差は、1966 年が 50 ポイントと最も大きく、その後 1978 年 45 ポイント、1989 年 31 ポイントと減少したが、その後は 1997 年には 47 ポイント、2006 年には 43 ポイントとなり、増加している。また、**表 4** は男女の差を、鍵主(2008)の日本語教科書の分析結果とともに、年代ごとにまとめたものである。語り手、語り手に言及される人物と同様に、どの年代においても日本語の教科書より、国語の教科書の方が男女の差が大きくなっている。

グラフ 3：男女別の登場頻度

(1－3)作品中の登場人物の中でもとくに主人公となっている人物の性別 (単位は%)

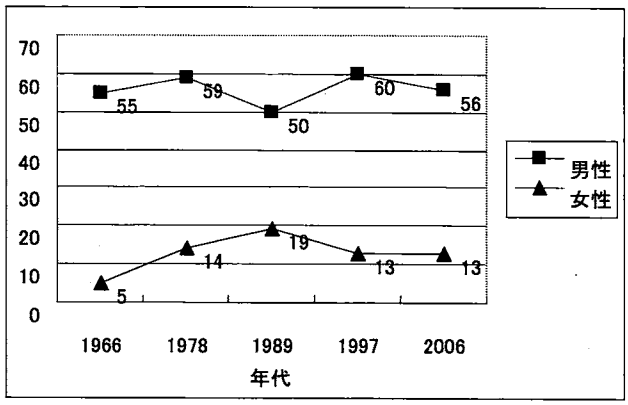

表 4：語り手に言及される人物の中でもとくに主体的な位置にいる人物の男女の差 (単位はポイント)

	60 年代	70 年代	80 年代	90 年代
国語教科書	50	45	31	47
日本語教科書	3	10	16	9

以上、登場の頻度の結果について述べた。その結果は、先行研究での結果と同じように、どの年代においても女性よりも男性の方が多く登場している(**グラフ 1～3**)。実際の人口比率では、男性も女性もほぼ同数存在しているのであるか

ら、教科書の中で、このように極端に男女の登場割合に差があるのは不自然である。教科書の中で登場人物や主人公の男女の割合が極端に異なれば、子供たちに、社会では男性の方がより登場の出番が多く活躍しているのだというイメージを植え付けることにつながる可能性もある。年代を経るにつれて、作者の男女差が小さくなっていったのは評価できるが、それでもまだ50ポイントもの差がある。登場人物、主人公の性別にも大きな差があった。

登場人物や主人公の男女の割合は年代を経てもあまり変化していない。作者の男女の割合の差が年代を経るにつれて小さくなっていったのは、男女の差をなくそうとしたときに、最も簡単に調節できるのが、作者の性別だったからではないかと思われる。しかし、登場人物や主人公は、その作品を読解していく際に必ず読者の目に入る部分である。今回調査対象とした国語教科書の中では、詩の中で女性だけが主人公になっているものはいくつかあったが、小説の中で女性だけが主人公となっているものは1つしかなかった。その小説の主人公も「母」としての役割を背負った人物として描かれていた。もっと個人として活躍している女性が主人公の小説があってもいいように思う。

2.2. 言及される際の呼称

2.2.1. 固有名詞

言及される際に、固有名詞で呼ばれる頻度を男女別に調査した結果を示す(**グラフ 4**)。どの年代においても女性より男性の方が、固有名詞で呼ばれる割合が高い。男性は年代を経るにつれて、固有名詞で呼ばれる割合が増加する傾向にある。男女の差は1989年には一度0ポイントになったが、1997年以降再び開いている。**表 5** は男女の差を鍵主(2008)の結果とともにまとめたものである。登場頻度とは対照的に、固有名詞で呼ばれる際の男女差は、90年代を除いて、国語教科書よりも日本語教科書の方が大きい。

グラフ 4：言及される際の呼ばれ方(2－1)固有名詞

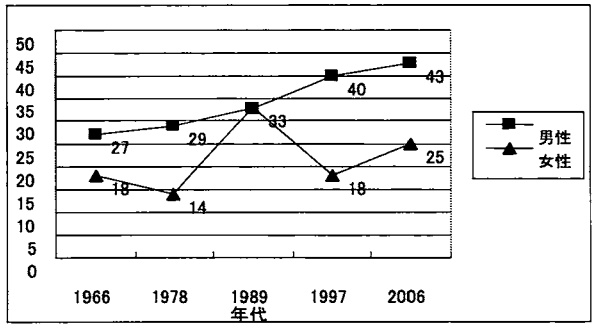

表 5：固有名詞の男女差 (単位はポイント)

	60 年代	70 年代	80 年代	90 年代
国語教科書	9	15	0	22
日本語教科書	52	77	31	19

2.2.2. 親族名称

言及される際に、親族名称で呼ばれる頻度を男女別に調査した結果を示す(**グラフ 5**)。どの年代においても、男性より女性の方が親族名称で呼ばれる割合が高い。男性が親族名称で呼ばれる割合は、年代を経るにつれて大きくなっている。男女の差は、1966 年が最も大きく、45 ポイントあったが、その後 1989 年から 1997 年の間の大きな増加を除けば、減少傾向にある(**表 6**)。

グラフ 5：言及される際の呼ばれ方(2－2)親族名称

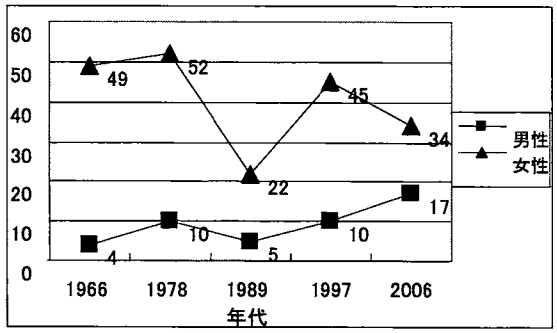

表 6：親族名称の男女差 (単位はポイント)

	60 年代	70 年代	80 年代	90 年代
国語教科書	45	42	17	35
日本語教科書	48	40	28	15

以上、言及される際の呼称についての結果を述べた。本稿が対象とした教科書においても、先行研究の結果と同じように、男性は固有名詞で、女性は親族名称で呼ばれる傾向があることが明らかになった(**グラフ 4･5**)。固有名詞で対象を言及する際には、その対象の個人としての側面を尊重しており、親族名称で対象を言及する際には、その対象の個人としての側面よりも家族の中の何らかの役割をもった人物としての側面を重要視していると考えられる。そのように考えると、今回対象とした国語教科書の中では、男性は個人としての側面を尊重された人物として、女性は家族の中の役割を担うことを期待された人物とし

て描かれていると言える。日本語の教科書においてそうであったように、国語の教科書においても、年代を経るにつれて呼称の男女差が小さくなっていくことが期待されたが、結果はそうではなかった。このように日本語の教科書と国語の教科書において呼称に関して、大きな差が見られた原因は何であろうか。それは、恐らく日本語の教科書の学習対象者が日本語を母語としない外国人であるので、人間関係を作り、維持していくために使用される呼称は、学習者の注目度が高いと考えたためではないかと思う。この点に関しては国語教科書に比べて日本語教科書のほうが、呼称において男女の差がないようにより配慮していると言うことができるだろう。

2.3. 登場人物の描かれ方

ここでは、中学校国語教科書において男性と女性が具体的にどのように描かれているのかを調査した結果について示す。

2.3.1. 1966 年の教科書

まず、1966 年の教科書について述べる。

「会議の始まり」の「神様」の呼称が「かれ」になっている（p.25, l.5)。神＝男性というイメージにつながる可能性がある。

「母の思い出」は夏目漱石が母の思い出を綴っている作品であるが、「母が父のところに嫁にくる」(p47, l.2)とあり、父が主体で、母がそこにやってきたというような書き方になっている。「母が父のところへ嫁にくるまで御殿奉公をしていた」(p.47, l.2)とも書かれており、母が家の中の仕事だけでなく、外でも働いていたが、結婚した後は、仕事をやめたことが暗に表現されている。また、「うちじゅうでいちばん私をかわいがってくれたものは母」(p.47, l.7)や「微笑しながら、心配しないでもいいよ。おっかさんがいくらでもお金を出してあげるから」(p.49, l.1-4)とも書かれており、「母」が子どもに愛情をかけている様子を詳しく表現している。「確かに品位のあるゆかしい婦人にちがいなかった。」(p47, l.9) では、女性である母を、品のある、ゆかしい、と形容している。

「一つの塊 —生れいづる悩みから」は文学者である「わたし」と漁夫として働きながらも絵を描く「きみ」との交流を描いている作品で、主人公である「わたし」、「きみ」ともに男性である。女性も出てくるが、「わたし」の女中と、「わたし」が泊まっている宿の主人の「かみさん」としてであり、2 人に関して個人のキャラクターを詳しく説明するような記述はない。「きみ」について書かれたものには、「農場の男も、その男にふさわしく大きなかみさんも、普通な背たけにしか見えないほどその客という男は大きかった。ことばどおりの巨人だ」(p.62,

l.13-15)、「筋肉で盛り上がった肩の上に、正しくはめ込まれた、雄牛のように太い首に、やや長めな赤銅色のきみの顔」(p.64, l.12-13)、「きみの与えるすばらしい男らしい印象」(p.65, l.3)などから、筋肉ががっしりして、からだが大きいこと、それが「男らしい」印象につながっていると読み取れる。また、「踏まれても踏まれても、自然が与えた微妙な優しい心を失わない、失えないきみのことを思った」(p.68, l.15-16)、「仁王のようなたくましいきみの肉体に、少女のように敏感な魂を見いだすのは、このうえなく美しいことにわたしには思えた。」(p.69, l.1)とあり、少女は敏感で優しい心(魂)を持っていると決め付けているような印象をうける。

「モゴール族探検記」は、モゴール族の調査にいった学術探検隊の探検記で主にモゴール語の調査をする、作者と山崎教授のことが詳しく書かれている。登場する学術探検隊のメンバーはみな男性の大学教授で、異国で熱心に調査に取り組む姿が描かれている。

「夏草」は、芭蕉の作品を紹介しながら、奥の細道での芭蕉の旅を解説している。「もともとじょうぶではないからだ」(p.155, l.6)、「飯坂温泉で特病が起こった」(p.158, l.5)、などと言及しながらも、「『奥の細道』は芭蕉の文章中最もりっぱなもので、おそらく日本文学中の名作として永久に残るものであろう」(p.156, l.2)と賞賛している。

「豊旗雲」は、万葉集、古今和歌集、新古今和歌集から和歌を紹介している。作者の紹介の部分が、男性の天智天皇の場合は、「第三十八代天皇。蘇我氏を滅して、大化の改新を断行された。」(p.168, l.7)と性別や親族名称は特に使わない書き方がされているのに対して、女性の持統天皇の場合は、「第四十一代女帝。天智天皇の皇女で、天武天皇の皇后。(p.168, l.8)となっており、女性の場合は女であること、誰の娘であるのかということ、誰の妻であるのかということに言及した書き方になっている。

「日本の美の伝統」では、紫式部の説明に、「平安中期の女流文学者」(p.177の注③)とあり、女性であることに言及した書き方になっている。

「故郷」は、20 年ぶりに故郷に戻ったわたし(男性)が、時を経て変わってしまった故郷の姿と、周りの人々との関係に思いをめぐらす物語である。主人公の幼馴染のルントウは「ひとりの少年が立っていて、首に銀の首輪をつるし、手に鉄の刺叉を構えて、一匹の『チャー』を目がけて、ヤッと突く。すると『チャー』はひらりと身をかわして、かれのまたをくぐって逃げてしまう。」(p.190, l.15)、「かれは、わなを仕掛けて小鳥を取るのがうまかった。」(p.191, l.16)、「夏になったら、おいらのところへ来るといいや。おいらは、昼のうちは海岸へ貝拾いに行くんだ。赤いのもあるし、青いのもあるし、『鬼おそれ』もあるし、『観

音様の手』もあるよ。晩にはとうちゃんといっしょにすいかの番をしに行くさ。」(p.193, l.5)、「かれは人見知りをしたが、わたしにだけは慣れて」(p.192, l.8)などと書かれており、少年ルントウは、人見知りはするが活発な少年として描かれている。「そのころは父も生きていたし、家の暮らし向きも楽で、わたしはぼっちゃんでいられた」(p.191, l.3-4)という記述では、父が死んだから貧しくなった、すなわち、父が稼ぎ、母は稼ぐ仕事はしていなかったという状況を描いている。また、母に関する記述では「わたしをすわらせ、休ませ、茶をついでくれなどして」(p.189, l.15)とあり、女性は茶をついだり、周りのものの世話をする役割を負っている。もう一人の女性の登場人物であるヤンおばさんについては、「筋向かいの豆腐屋の店には、一日じゅう、いつもヤンおばさんという人がすわっていて、人々から『豆腐屋小町』と呼ばれていたっけ。しかし、その人なら、おしろいを塗って、ほお骨もこんなに出ていないし、くちびるもこんなに薄くはなかったはずだ」(p.197, l.1-4)、「当時人のうわさでは、彼女がいるために、豆腐屋は商売が繁盛するということであった」(p.197, l.5)、と書かれている。美人な「豆腐屋小町」のいるおかげで、豆腐屋が繁盛していたような書き方で、女性の容姿を重要視しているような表現である。

「父が庭にいる歌」は、死んでしまった父への思いを描いた詩である。女性を「母」として言及するものが多い中、この詩では、「父」としての男性にも言及しており、評価できる。しかし、父がどのような人物であったかについて詳細な言及はされていない。

「それでも地球は回っている」は、ガリレオ＝ガリレイの地動説に反対する学者とガリレオ＝ガリレイとのやりとりを描いた脚本である。女性の登場人物である、サルティのおかみさんが「（大公の行く手をさえぎり、焼いた菓子をのせたさらを差し出す。）殿下、巻きパンをお一つ。」(p.269, l.8-10)と言う場面があり、食事を勧めるのが女性になっている。

「幸福について」は幸福とは何かについて書いた随想である。この作品の中では、「一日の勤めに出て夕方帰ってくる。そうして、炉ばたで母や妻のくんでくれるお茶を飲む。夕日がさしてくる。そこへ身を横たえて、ゆっくり休みながら、お茶を飲む。ほっと一息つく。それは小さなことかもしれない。つまらないことかもしれないが、それがわたしには最大の幸福と思える。」(p.278, l.2-5)という記述がある。お茶をくむのは、母や妻など女性の仕事である、という性的役割分業を肯定する表現である。また、「病気している子どもが、ちょっとでも快方に向かってくると、それが無上の喜びとなる。一さじよけいにきょうはご飯を食べたというだけでも、母にとっては、この世の最大の喜びである。子どものなんでもないことが、母にとっては喜びであり、それが母の幸福である。」

(p.279, l.14)とも書かれており、母性が大きく強調されている。

「夢を語る」では、男女それぞれ 1 人の生徒の、夢をテーマに書かれた作品が掲載されている。女子の作品では、「何年か、あるいは何十年か先のわたしは、たぶん看護婦兼母親になっているでしょう。私の夫は、どこか、おそらく地方の小さい町の静かな郊外で、小さな医院を経営しているでしょう。わたしは、この信頼できる片腕として働いています。(中略)わたしは、やさしく赤ん坊をあやしたり、病気で苦しむ老人をいたわってあげたり、(中略)笑顔でやさしく対応しながら、手早くてきぱきと調剤をしてあげる。」(p.284, l.5-10)、と書かれている。看護師として働いているという点は評価できる。しかし、「わたし」は結婚した後は、その医者である男性の片腕として働くことを希望しており、男性の補助的な立場であることに肯定的な態度である。また、女性は看護師、男性は医師というイメージを肯定しているようにも受け取ることができる。そして、「若竹のようにすくすくと伸びた男の子と、やさしさの中にしっかりした心根を持った女の子、これがわたしの子どもたちです。」(p.284, l.13-14)という表現も見られる。男の子にはすくすく、女の子にはやさしさと、性によって期待される育ち方が違っている。また、「わたしのように特別の才能に恵まれない平凡な人間は、世を驚かすような大事業や、すばらしい発明・発見など、望んでもできない相談です。わたしは、自分の力の及ぶ範囲で、自分の最もよいと信ずる生き方をしたいのです。」(p.285, l.6-8)という記述では、自分のできることを精一杯やりたいというという意欲を示してある一方で、「特別な才能に恵まれない」と自分を低く評価していて弱気な印象も受ける。

男子の作品では、「関川くん」、「木島くん」、「ぼく」の 3 人の夢が語られている。関川くんについては、「ふだん口数の少ないかれが、あんなに雄弁にしゃべるのを聞いて、びっくりしてしまった。かれの目がきらきらと輝いているのを見て、夢というのはほんとうにいいものだな、と思った。」(p.286, l.6-7)と書かれているように、家業の農業をもっと発展させ、「収益を上げ、生活を高めていく」(p.286, l.2)という夢について意欲的に語ったことに言及している。また、木島くんについては、「堂々とこう言う。『ぼくは将来きっと南米に移住する。(中略)ぼくは、なにも無いところから始めて、すべて自分の頭と、自分の力で作り上げてみたい。(中略) 男と生まれたからには、たとえ失敗するとしても、ぜひやってみたいんだ。』」(p.286, l.13-p.287, l.5)と言及されている。「男と生まれたからにはたとえ失敗するとしても、ぜひやってみたいんだ。」という表現は、男性には、何に対しても恐れず、果敢に挑戦していく態度が求められていると暗に表現しているようにとらえることができる。また、「木島くんは、筋骨たくましく、不敵なつら構えをしている。目も鼻も手足もなにもかも大きい。そして、

言うことも大きい。少なくとも、今まではやると宣言したことは、きっとやり遂げてきた、強い意志の持ち主だ。」(p.287, l.3-5)とも書かれており、男性はたくましく、何でも大きいといった感じを読者に与える。「ぼく」に関しては、「『無名』」でけっこうだ。ただし、自分で、生きがいがある、と思うことのできる仕事に、全力をあげて取り組みたい。」(p.288, l.6-7)や「狭い土地に、たくさんの人間が住んでいるこの日本の自然を、高度の技術によって改造し、すばらしい世界の楽園にしたい。これが、ぼくの夢である。」(p.289, l.4-6)と夢に対して意欲的な態度が描かれている。また、「今でも、日曜大工の父の手伝いは大好きだ。」(P.288, l.10)という表現もある。日曜大工は母ではなく父の仕事になっている。

2.3.2. 1978 年の教科書

次に 1978 年の教科書について、調査結果を述べる。

「山椒魚」では、「一匹の小えびが岩屋の中へ紛れ込んだ。この小動物は、今や産卵期の真っただ中にあるらしく、透明な腹部いっぱいにあたかもすずめの稗草の種子に似た卵を抱えて、岩壁にすがり付いた。」(p.34 下, l.1)とあり、女性の子どもを生むという側面を強調している。また、メスの小えびをさして彼と言っている(p.35 下, l.8)箇所もある。

「生まれ出づる悩み」は 1966 年の教科書の「一つの塊 —生れいづる悩みから」と同じ作品であるので、結果については 1966 年を参照のこと。その結果に加えて、1966 年の教科書では、収録されていない部分で、「親身な、優しい、そして男らしい心に生まれたきみ」(p.100 下, l.2-3)という表現があった。「親身」、「優しい」は「男らしい」には入っていないことが分かる。男らしさ、女らしさ、を肯定するような表現で好ましくない。

「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」では、「それはながい間私たち女の前にいつもおかれてあったもの、ほどよい大きさの鍋やお米がぷつぷつとふくらんで光り出すに都合のいい釜や劫初からうけつがれた火のほてりの前には母や、祖母や、またその母たちがいつもいた」(p.142, l.3-p.143, l.1)と炊事が長い間女性の仕事であったことに言及している。そして、その後には、「炊事が奇しくも分けられた女の役目であったのは不幸なこととは思われない、そのために知識や、世間での地位がたちおくれたとしてもおそくはない　私たちの前にあるのは鍋とお釜と、燃える火とそれら懐かしい器物の前でお芋や、肉を料理するように深い思いをこめて政治や経済や文学も勉強しよう」(p.144, l.6-p.145, l.4)と書かれており、女性の社会的進出を肯定的にとらえている。「鍋とお釜と、燃える火とそれら懐かしい器物の前で」とあり、炊事はもう女性にとって、懐かしいものであり、女性だけが担う仕事ではないことを示唆しているようである。

「故郷」については、1966年にも収録されているので結果は上節を参照のこと。

「天の香具山」では、万葉集の和歌の紹介がされているが、作者紹介が「額田王　『万葉集』初期の代表的女流歌人」(p.186) となっており、女性であることが強調されている。

「グリム兄弟」は、グリム兄弟についての伝記である。「この兄弟のいたわり合いと励まし合いほど、豊かで感動的な人間関係は、世界の歴史にも類がないといえよう。」(p.259, l.6-7)「兄は精力的な研究者であり、弟は詩人的な素質を持っていた」(p.259, l.10)など肯定的に書かれている。登場人物には、「首都カッセルで選帝侯夫人の女官長をしていたおば」(p.261, l.6-7)、など働く女性も出てくるが、「末の妹ロッテが結婚したために、グリム一家は男所帯となったが、一八二五年、ウィルヘムが幼なじみのドロテーアを妻として迎えたので、明るさを取りもどした。」(p.266, l.9-10)と書かれている箇所もあり、女は家庭に明るさを添える存在であるかのような言い方もある。また、「彼女は、貞淑な妻としてよく夫に仕え」(p.267, l.1) という表現もあり、妻は夫に仕えるものという考えを肯定する書き方になっている。

2.3.3. 1989年の教科書

次に1989年の教科書の調査結果について述べる。

「わたしを束ねないで」は、いろいろなことに縛られず自由に生きることを歌った詩であり、作品中には、「わたしを名づけないで　娘という名　妻という名　重々しい母という名でしつらえた座に坐りきりにさせないでください」(p.13, l.10-p.14, l.1) という表現がある。家族の中での役割を背負ったわたしを否定し、自由な個人としてのわたしとして生きることを訴えており、評価できる。

「車掌の本分」は、ある遊園地のサル山で、モンキートレインの運転手や車掌を任されているサルを擬人的に表現した物語である。電車の運転手や車掌を任されているのは皆、雄のサルになっている。乗り物の運転手は男性であるというイメージを肯定する表現である。

「わたしはこう考える」ではいくつか生徒の文章が紹介されている。挿絵が描かれているのだが、短パンでスポーツをしている1人の男子を、1人の女子が遠くからフェンス越しにみている(p.104右下)ものになっている。活発にスポーツをするのは男子で、女子は遠くから応援するというようなイメージと結びつき、男子は活発に活動し、女子はそれを支えるといったような役割分担を肯定しているように思える。例文として運動部に所属している男子学生2人の部活

動への意見が提示されている。

「故郷」は1966年の教科書にも収録されていた。調査結果は1966年の教科書を参照のこと。

「わさらび」は万葉集、古今和歌集、新古今和歌集の和歌の紹介をしている。作者紹介の部分で、「額田王　『万葉集』の代表的女流歌人。天智・天武両天皇に仕えた」(p.185, l.1)、「小野小町(生没年未詳)平安時代初期の女流歌人。六歌仙の一人に数えられる。情熱的で繊細優美な歌が多い。」(p.187, l.6-7)、「式子内親王後白河天皇の皇女。『新古今和歌集』の代表的女流歌人。」(p.189, l.2)と書かれており、女性であることが言及されている。

「夕鶴」は鶴の恩返しの脚本である。矢に討たれてけがをしたところを人間に助けてもらった鶴が、恩返しをするために人間(女性)に変身して、恩人の男性の家を訪ね、身を犠牲にしながら機織をして男性に尽くすという物語である。矢に打たれたか弱い存在が女性、それを助ける強い存在が男性という構造になっており、女性が弱く、男性が強いという固定観念を肯定する内容のように読める。

「人間の叡知を　―核状況下における文学―」でも、「イギリスの女流作家スコット」(p.260, l.10 および p.262, l.11)と書かれており、作家が女であることにわざわざ言及している。

2.3.4. 1997年の教科書

次に1997年の教科書の調査結果について述べる。

「握手」は、児童擁護施設で育った「わたし」とその施設で子どもの世話をしていたルロイ修道士との物語である。この中では、「捨て子は春になるとぐんと増える。陽気がいいから、発見されるまで長くかかっても風邪をひくことはあるまいという、母親たちの最後の愛情が春を選ばせるのだ。」(p.29, l.7-9)という表現がある。子どもを育てるのは母親であるという前提のもと、だから、捨てるのも母親と言っているような印象を与える可能性がある表現である。また、「あの子(川上一雄君)は今市営バスの運転手をしています。」(p.29, l.12) という表現があり、ここで言及されているあの子とは、川上一雄君という男性の登場人物である。乗り物の運転手が男性になっており、固定したイメージを与える可能性がある。

「家族について考える」では、生徒の文章を紹介している。挿絵が描かれており(p.36 右下)、女の子がエプロンをつけて一人で家事(掃除)をしている。布を手にたくさん持っているので、これから洗濯をするところであると解釈することもできる。うしろの方には台所のやかん、足元には掃除機が描かれており、

掃除・洗濯・料理などの家事を連想させる。生徒の書いた例文は、「たとえ家族がいなくても」というタイトルで書かれており、「妊娠中の母親が公害物質を含んだ魚を食べたために、赤ちゃんに影響が及んだもので、その娘さんは、誕生以来自由に動くこともできず、家族のこともわからないのだ。もう成人した、自分より体の大きい娘さんを、お母さんは抱っこして御飯を食べさせ、着がえさせ、おふろにも入れる。母親の愛情というのはなんて強いのだろう、わたしは感動して涙が止まらなかった。」(p.42, l.6-10)という箇所がある。母親の母性を強調する内容である。

「言葉と意味と経験と」は説明文であるが、その中には、「言葉の習得は、もの心ついたころから早速始まる。例えば、一人の幼児が道でワンワンと鳴く動物を見かける。幼児を抱いて散歩に来ていた母親は、あれは「イヌ」なのよと教えるであろう。(中略)また別のワンワンと鳴く動物を見るとする。母親は、あれも「イヌ」だと教えるであろう。」(p.68, l.10-p.69, l.7)と書かれた箇所がある。これは、幼児の子育てをするのは母親であるというイメージを持たせる可能性がある表現である。また、同作品内には、「夏休みに旅行に連れていってあげようとお父さんが言ってくれた」(p.72, l.10) という表現もある。日常生活の中で散歩するなどして一緒に過ごすのは母親、父親は夏休みなどの特別なときにだけ過ごすというようなイメージを作りかねない表現だ。また、「ヘレンケラー女史」(p.71, l.12)と書かれている部分もある。女であることを強調する必要があるのだろうか。

「高瀬舟」は弟を殺し、遠島を申し渡された喜助と、罪人の護送を命ぜられて、一緒に船に乗り込むことになった庄兵衛との交流を描いている。作品中には、「庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になっていてもう女房に子供を四人も生ませている」(p.96, l.11)という表現がある。女房に子を生ませるという表現は、女性の子を生むものとしての側面を強調しているように思われる。

「故郷」については、1966 年にも収録されていたので、結果は 1966 年の教科書を参照のこと。

「君待つと」では、万葉集、古今和歌集、新古今和歌集の和歌を紹介している。作者の紹介が「持統天皇　第四十一代天皇。女帝。宮廷から柿本人麻呂をはじめ多くの優れた歌人を出し、和歌の発展に貢献した」(p.187, l.2-3)、「額田王　万葉初期の女流歌人で、天智・天武天皇に仕えた。叙景歌・叙情歌の両方に優れていた」(p.187, l.8-9)、「小野小町　平安時代初期の女流歌人。六歌仙の一人に数えられる。繊細で情熱的な歌が多い。」(p.189, l.9)、「宮内卿　後鳥羽上皇に仕えた女房。歌に精進のあまり、十代で没したと伝えられる。」(p.191, l.4-5)、「式子内天皇　後白河天皇の皇女。優しさと気品をたたえた歌が多い。」(p.191,

l.10)、など、年代の古い教科書と同様に女性であることに言及している。

「温かいスープ」では、作品中に、「席も十人そこそこしかない小さな手作りの料理店であった。白髪の母親が台所で料理を作り、生っ粋のパリ美人という感じの娘がウェイトレスと会計を掛け持ち、二人だけで切り盛りしていた。」(p.282, l.5-7) という箇所があり、個人で店を経営し、働いている女性が描かれており評価できる。

「わたしを束ねないで」については1989年の教科書にも収録されていたので、1989年の教科書の結果を参照のこと。

2.3.5. 2006年の教科書

最後に2006年の教科書について調査した結果を述べる。

「故郷」については1966年、**「わたしを束ねないで」**については1989年、**「握手」**、**「高瀬舟」**、**「温かいスープ」**、**「君待つと」**については1997年にも収録されているので、結果についてはそれぞれの年の結果を参照のこと。

「メディア社会を生きる」では、「映画やテレビはしばしば、男の人は強く女の人はか弱い、南の国はのんびりしているなどと、人や場所のイメージを勝手に決めつめてしまうことがある。」(p.45, l.20) と述べられており、男性が強い、女性がか弱いというのは、勝手なイメージでしかないということに言及している点が評価できる。

「奈々子に」は、父の子供への愛情を歌った詩で、「お父さんがお前にあげたいものは健康と自分を愛する心だ」(p.187, l.5-8)、「苦労は今はお前にあげられない。お前にあげたいものは香のよい健康とかちとるにむづかしくはぐくむにむづかしい自分を愛する心だ」(p.188, l.4-11)と書かれており、女性を親族名称で呼ぶ表現が多い中、男性の父性も前面に押し出している作品であり評価できる。

2006年の教科書では、発表や話し合いなどの場面の挿絵がいくつか描かれているが、制服を着た男子学生、女子学生が1人ずつ描かれており、性別で人数に差がでないようにという配慮されているようである。「相手を意識して伝えよう」では、男子学生1人と女子学生1人が小さな子供3人に発表している(p.38左下)。「新聞の特徴を生かして書こう」では、女子学生1人と男子学生1人が新聞を読んでいる(p.50 右下)。「話し合って考えを深めよう」では、女子学生1人と男子学生1人が教室の前で発表している(p.106 右下)。また、「未来に向かって－アルバムを編み、語り合う」では、野球のバットとグローブを持ったユニフォーム姿の男子、教科書を持った制服姿の男子、白衣を着てビーカーを持った女子、笛を持った制服姿の女子、テニスのラケットを持ったユニフォーム

を来た女子(p.170 下)が集まっている挿絵が描かれている。男女どちらかに、スポーツ、勉強が偏ることなく、描かれており、評価できる。

3. 結論

国語の教科書において、登場頻度、言及される際の呼ばれ方、のそれぞれにおいてどの年代の教科書でも男女差が見られた。

登場頻度を見た場合、作者、登場人物、主人公となっている人物ともに、男性の方が女性よりも多い。登場人物や主人公となっている人物においては、年代を経ても男女の差は変わらずに見受けられたが、作者の性別においては、年代を経るにつれて男女の差が小さくなっていた。

また、言及されるときの呼ばれ方では、鍵主(2008)で指摘されたのと同じように、国語の教科書でも、男性は固有名詞で、女性は親族名称で呼ばれる傾向があることが明らかになった。親族名称で呼ばれる男女の差は、年代を経るにつれて全体的に小さくなっている傾向が見られた。

これらの結果により、国語の教科書の中の男女差別は、作者の性別や親族名称で呼ばれるときなどの視点から見れば、減少傾向にあるといえる。しかし、今回対象とした国語の教科書において、その他の大部分では、女性の登場割合が極端に低かったり、男女の役割が固定されていたりと男女差別的な表現が残っている。

そして、登場人物の描かれ方では、母としての役割を担った人として女性を描いたり、女らしさ、男らしさを強調したり、女性が男性の補助的な役割をするものがみられたが、最新の教科書では、父の愛情を描いた詩が収録されていたり、挿絵も男女を均等に配置するように配慮されている。

また、国語の教科書と日本語の教科書を比較した場合には、登場頻度では、国語教科書は日本語教科書よりも圧倒的に男女差があることが分かった。この点においては、日本語教科書は国語教科書より、男女の差が小さくなるように配慮していると言える。また、固有名詞の男女差においては、90 年代を除いて、国語教科書より日本語教科書の方が男女の差が大きい。しかし、年代を経るにつれて呼称の男女差が小さくなっているという点では、日本語の教科書は、国語の教科書よりも男女の表現に差がないように配慮していると言える。

残念ながら、本稿で分析の対象とした教科書の中では、年代ごとに男女差が小さくなる傾向が見受けられる点があるとはいえ、最も新しい教科書の中でさえも登場頻度や呼称などの男女の表現に大きな差があった。教科書を使って学ぶ子供たちに、男女が不平等な扱いを受けているという印象をあたえてしまわ

ないように、今後の教科書作りがより男女の差がないように配慮をして行われることを期待したい。

今後の課題について以下に述べておこう。本稿では、分析対象を一部の国語教科書に限定した。しかし、国語教科書の現状を知りそれに基づき男女差別的な表現を解消し、子供たちの教育に役立てるためには、現在採用されているできるだけ多くの教科書を分析し、それを実際の教科書作りに生かしていく必要がある。また、今回の調査では、日本の国語教科書のみを対象としたが、同じ条件で他の国の教科書と比較を試みることも必要だろう。それによって国語教科書の問題点や日本語教科書での配慮点を明らかにし、教科書作りに役立てることが期待できるからである。

文献

－伊藤良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子(1991)：『教科書の中の男女差別』明石書店.

－鍵主智美(2008)：「お母さんなわたしと太朗君なぼく ―日本語教科書における男女の表現について―」. In『論文集』 第3巻 , 2007年度社会言語学演習研究論集, 1 - 17.

－かながわ女性会議教育部会(1992)：『教科書に女性の視点はあるか』会田印刷.

－ことばと女を考える会(1985)：『国語教科書にみる女性差別』三一書房.

－出版労連教科書対策委員会(1997)：『教科書レポート97』日本出版労働組合連合会.

－田中和子・諸橋泰樹編(1996)：『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて』現代書館.

－21世紀教育問題研究会(1994)：『小学校全教科書の分析』労働教育センター.

教科書

－石森延男ほか(1966)：『中等新国語　三』光村図書出版.

－石森延男ほか(1978)：『中等新国語　三』光村図書出版.

－石森延男ほか(1989)：『国語3』光村図書出版.

－栗原一登ほか(1997)：『国語3』光村図書出版.

－宮地裕ほか(2006)：『国語3』光村図書出版.